

藤岡啓介の翻訳玉手箱 第3篇
公開講座 プロになるぞ！！ 第15回
コメント一覧

cut

cut in: 話をさえぎる、割り込む。

farewell salutation

「別れの挨拶」じゃ冥途いきだな。

grave

ほらごらん、「墓場」が出てきた。

亡霊のような物々しい様子

これが変だな。訳者も変だと思っているだろうな。

そして、あたかもお墓から外へ移動させるかのように、ベッドのそとへと彼を動かしました。
要再考、というのが藤岡さんが困ったときのコメント。

重々しく

間違いではないけど、幽霊が重々しいのはあちらのことで、こちらだったら宙に浮いている。こう
したとき、誤訳ではないよと著者にちょっとウインクを送りながら「音もなく厳めしく」としたらどうか
な。これだと日本語で読める。

寝床へと車椅子を押して行ったが、あたかも彼の墓に向けて押して行くかのようなようだった。
この訳文、ずいぶんあけすけだな、お色気がない。

若い紳士

誰のことかな？

念入りによく考えて言葉づかいにじゅうぶん注意し、冷やかに彼らを横目で見ながら「若い紳
士」について注意を向けて、ジョン・ジェイゴ氏はおもてなしの務めを果たしました。私は煙草を
受け取りました。礼儀正しく躰けられている、ざらざらと輝く茶色の目をしたこの男性は、私に
ゆっくりと休むことを祈り、部屋を去りました。

文意定かならず、困った。眠り姫はどこかでこの小説の読みから「外れている」らしい。いや、自
分で小説を書こうと思ったことがなく、いわゆる文学作品の読書量がたりないのかな。

発しながら

「発しながら」もそうだけど、この辺、山場だと思って緊張しているのかな、古い日本語の言い回
しが多いな。

シガー

「葉巻」でもいいけど、どうせ嫌われ者だ、カタカナにしまえ。

began

こういうときのbeginは難しいですね。「話し出した、言い始めた、口火を切った」などいろいろと考えますが、実はどうでもいいつなぎの言葉なのですね。

added

このaddもあまり苦しまないで訳しましょう。

手に煙草いれ

タバコの専門店に行ったことがないのだろうな。銀ブラも無駄ではないぞ。

彼の煙草で毒殺されるぞ

？

だった

？

振りおとしました

？

子供でもあるかのようにだった

こういう言い回し、古いですね、でも、一字一字追わなくても「まるで子供」と読んでくるとあとは眼をやらなくても頭に入りますね。こういう言い方を常套句といいます。古臭い文章語表現ですが読者は読んでしまいます(ここでは「句」ではありませんが)。もっとも、まったく読書歴のない読者には無理かな。でも、彼らはコリンズの読者になるかしら。

床につたって

床に突っ立って、なのだろうが、変だな。よく辞書をみなければ。

glass door

「ガラス戸」だと、日本家屋のガラス入りの引き戸になってしまう。ガラスは高価な時代、ここは「ガラスのドア」にしたいな。

farm-garden

「農場に付属している庭園」かな。でも、それじゃ解説かな。ぼくらの感覚で思うほどlittleではないだろうな。高価なガラスをはめ込んだドアがあり、この土地では珍しい庭園に通じている、とても読んでおきたい。

elm-tree

ロマンチックな物語の舞台に打ってつけ。こんな情景を作るからコリンズは大衆作家と言われてしまう。でも、そうでないとされるジョージ・エリオットだってバカくさい情景をずいぶんと設定しているな。

The grand repose of nature

大いなる自然の静けさ。

misanthropical

「人間嫌いの」。モリエールの作品に“Misanthrope”があって、これを辰野隆先生が「孤客」とし、ここまではしのびなく「ミザントロブ」とルビを振りました。「厭世家」も辞書にあるけどぼくは「人間嫌い」だ。

species

the our speciesと複数形で「人類」

もういちど自分の心像に甘んじていることに気づくとき、自分には運命的なところがあるとすぐに確信しました。病人ならだれでもこういうことを意識するでしょう。文意不明、というかごじゃごじゃしている。

ちょうどその時、肩にそっと手が置かれたのに気づいた私は、ナオミによって再び人の世界と折り合いをつけていく気持ちになっていた。せっかくの心境、もっと気分を出して訳してもらいたいな。

わたしには理解できた。いや、理解できたと思った。人々が、人間であることに悲しくも絶望し修道院に向かったときがあったことが、その絶望が、分かったようなきがした。作者が得意になってうたい上げている文章です。気取ってもいいでしょう。